News Letter vol.17

Japanese Society for Dance Research

17号よりニューズレターが変わりました！！

目　次

1．巻頭言:ー新しいニューズレターに向けてー　舞踊学会会長:猪崎弥生

2．第71回舞踊学会大会のご案内　第71回舞踊学会大会実行委員長:貫成人

3．海外の舞踊学関連学会の紹介
3-1．アジア圏の学会（舞踊学）
韓国における舞踊学関連学会の現況と舞踊歴史記録学会
The Society for Dance Documentation & History（SDDH）
朴暖映（パク ナヨン）（成均館大学校芸術大学舞踊学科兼任教授，韓国歴史記録学会理事）
聞き手:波照間永子（明治大学）

3-2．英語圏の学会（舞踊学・音楽学）
①Dance Studies Association (DSA)
中島那奈子（ベルリン自由大学）
②International Association of Physical Education and Sport for Girls and Women（IAPESGW）
八木ありさ（日本女子体育大学）
③International Council for Traditional Music （ICTM）
小林敦子（明治大学）

4．私にとっての在外研究
4-1．ドイツ・アフリカ:研究の基盤形成と人的ネットワーク構築　遠藤保子（立命館大学）
4-2．アメリカ合衆国:異種の学問＆自分との出会い　外山紀久子（埼玉大学）

5．国際学会・シンポジウム発表報告
Asia Pacific Dance Festival 2019　高橋京子（フェリス女学院大学）

6．委員会より
6-1．学会誌編集委員会:森立子
6-2．2020年度学会大会:塚本順子
6-3．例会企画運営委員会:八木ありさ
6-4．研究奨励賞選考委員会:柴真理子
6-5．HP管理委員会:杉山千鶴
6-6．学術会議関連:杉山千鶴・貫成人
6-7．ニューズレター編集委員会:波照間永子

7．事務局より

編集後記　奥付

1．巻頭言

ー新しいニューズレターに向けてー

舞踊学会会長　猪崎　弥生

舞踊学会のニューズレターは、2011年11月26日に創刊され、2019年6月4日の第16号まで年2回のペースで刊行されています。創刊の辞において古井戸秀夫元舞踊学会会長が書かれていましたように、ニューズレターは、「ウェブ上に展開する、舞踊を研究する人々、舞踊を愛好する人々が交流する場となること」を目的としたものです。これまでニューズレターは、「この時代におけるダンスのチカラ」をメインテーマに掲げ、折々の舞踊に関する今日的課題について、旬の研究者や実践家からの原稿とインタビュー記事によって、読み物として充実したものを発信してまいりました。ニューズレターを読み返してみれば、その時代の社会と舞踊の在りようが生き生きと伝わってきます。編集部の努力により、会員の皆様に対してその時々に必要な興味深い内容が掲載されていました。

今後は、会員の皆様に更に有益な情報をお届けするべく、舞踊学関連の情報発信を中心とするニューズレターへと新しい一歩を踏み出します。研究者のみならず、実践家にとって、今の舞踊がどのような状況にあるのか、舞踊が直面する課題は何かなど、そうしたことに注意を向け、考えるための情報をお届けしたいと思います。まずは、海外の舞踊学関連学会の動向や在外研究で得られた情報をお知らせします。また、会員の国際学会での発表報告やダンスフェスティバルなどの活動等も紹介します。新しいニューズレターが、会員の皆様にとって国内外の舞踊学関連の情報が得られる場として機能するように努めてまいりたいと存じます。

皆様の感想やご意見、あるいはご提案をお寄せください。新しいニューズレターが、これまでのニューズレターとともに皆様の研究や実践につながるよう、そして、皆様お一人おひとりの興味や関心を反映する内容になってゆくよう願っています。

２．第71回舞踊学会大会のご案内

第71回舞踊学会大会について

第71回舞踊学会大会実行委員長　貫　成人

令和元年12月7日（土）、8日（日）、第71回舞踊学会大会が開催されます。
http://www.danceresearch.ac/taikai/taikai.htm#sanka

大会テーマは、「舞踊学の現在と可能性」です。

多様な主題、方法論にまたがる舞踊学を、その全体において振り返る機会はなかなかありません。

今回は、舞踊批評家、文芸評論家で、『ダンスマガジン』の編集長でもあった三浦雅士氏に、大所高所から舞踊研究の射程を語っていただくほか、すぐれた若手中堅研究者に、美学や人類学、情報学、幼児教育など、舞踊研究の様々な分野・方法論からの活発な討論を繰り広げていただきます。

舞踊学会の会員どなたにでも関わりがあり、関心を持っていただけるテーマかと存じます。

また、今回はポスターセッションを新たに設けました。若手研究者や実技で活動していらっしゃる会員の方々が、より容易に大会に参加できる門戸になれば幸いです。

会場は専修大学生田キャンパスとなります。「専修大学」というと「神田神保町」というイメージですが、実はその大部分は川崎市多摩区にあります。小田急線「向ヶ丘遊園」からの便が悪く、また、とりわけ日曜は買い物・食事にもご不便をおかけしますが、なにとぞよろしくお願い申し上げます。

また、今回より、個人口頭発表、ポスター発表「抄録」、基調講演・シンポジウム「概要」は、事前に学会HPに掲載しました。当日、大会実行委員から紙媒体での抄録・概要集は用意いたしませんので、ご自分でダウンロード、プリントアウトしていただければ幸いです。

大会参加申込、参加費お支払期限は１１月30日、残念ながら総会ご欠席の場合の「委任状」提出締切は１１月25日となります（buyougakkai2019@gmail.com）。
大会参加費は、事前支払の場合、当日支払いより500円低い金額で設定しております。

みなさまに当日、生田キャンパスでお目にかかるのを楽しみにしております。

2019年11月12日

第71回舞踊学会大会実行委員長
貫　成人

3．海外の舞踊学関連学会の紹介

3-1. アジア圏の学会（舞踊学）

韓国における舞踊学関連学会の現況と舞踊歴史記録学会
The Society for Dance Documentation & History（SDDH）

朴暖映（パク　ナニョン）
成均館大学校芸術大学舞踊学科兼任教授
韓国歴史記録学会理事
博士（舞踊学）

聞き手：波照間永子（明治大学）
通訳：蔡美京

Q1.　朴先生、今日はお時間をいただき、ありがとうございます。まずは、韓国の舞踊学関連学会の概況について教えてください

韓国には、学術団体をとりまとめる機関として、政府が統括している韓国研究財団があります。この財団に登録されている学会と、まだ登録されていない学会があります。登録されている主な学会は５つあります。大韓舞踊学会、韓国舞踊歴史記録学会、韓国舞踊芸術学会（梨花女子大学が主催）、韓国舞踊教育学会、韓国舞踊科学学会です。

この中で、規模の大きい学会は、大韓舞踊学会と韓国歴史記録学会です。大韓舞踊学会は一番古い学会で、1974年に設立されました。学術研究だけでなく、舞踊コンクールなども開催しており、舞踊に関心をもつ様々なディシプリンの会員から構成されています。一方、韓国舞踊歴史記録学会は、韓国舞踊歴史学会と韓国舞踊記録学会が統合して2014年に設立されました。歴史や記録（ドキュメンテーション）に関心のある者が参加しています。

Q2.　韓国歴史舞踊学会が特に力を入れている取り組みなどありますか？

グローバル化を促進するため、海外の研究者を理事に迎えています。国際学術大会は、韓国舞踊協会と共催で行っています。韓国舞踊協会は学術団体に登録されていませんが、1961年に設立された組織で、実践を中心としています。国際学術大会では、韓国歴史舞踊学会が学術シンポジウム等の企画を、韓国舞踊協会が実践面の企画を立てて、相互に協力しながら運営しています。

この国際学術大会は、これまで、日本や台湾・中国・インド・カナダ・アメリカなどから研究者を招いて議論してきました。一昨年は猪崎弥生先生にパネリストをお願いしたんですよ。

Q3.　最後に、日本の舞踊学会に期待することは？

舞踊の相互理解をはかるための環境や機会を作って欲しいです。例えば、CCN（Centres Chorégraphiques Nationaux：フランス国立振付センター）のような総合的なセンターがあると良いですね。そこにアクセスすれば、映像や資料を手軽に得たり、ワークショップを受ける日時や場所を知ることができる･･･外国人が日本の舞踊と出会う入り口になるような「情報や体験を提供する仕組み」を作っていただけたら嬉しいです。

朴先生、ありがとうございました。

3．海外の舞踊学関連学会の紹介

～　基本情報　～

学会名（原語）	The Society for Dance Documentation & History 【略名】SDDH
日本語訳名	舞踊歴史記録学会
学会設立年	1984
事務局（場所）	Kangwon National University（江原大学校）
HP	http://www.sddh.org/
趣旨・大会情報等	2014年9月、韓国舞踊歴史学会と韓国舞踊記録学会が統合して設立された。歴史と記録の統合を通し、舞踊学の基礎を固め、韓国舞踊学を世界に発信することを目的とする。さらに、実技と研究の統合を通して、実技の専門性を追求する。
ジャーナル	『舞踊歴史記録学会誌』年4回 （3月・6月・9月・12月の末日） 英文による投稿可
入会方法	E-mail: ds_dh@daun.net 入会フォーム　http://www.sddh.org/html/sub6_01.html 入会フォーム（英語版）に記入してE-mailを送る。 （英語のホームページを現在作成中）

3．海外の舞踊学関連学会の紹介

3-2. 英語圏の学会（舞踊学・音楽学）

Dance Studies Association (DSA)

中島那奈子（ベルリン自由大学）

１．基本情報

学会名（原語）	Dance Studies Association 【略名】DSA
日本語訳名	舞踊学会
学会設立年	2017年
事務局（場所）	Association Executives Group (AEG) 7044 South 13th Street Oak Creek, WI 53154 414.908.4951 x103
HP	http://dancestudiesassociation.org
趣旨・大会情報等	主にアメリカで行われる英語圏の舞踊学会で、国際学会としても機能しています。これまで英語圏にあった二つの主要な舞踊学会である、理論研究中心のCongress on Research in Dance (CORD, 1969設立) と、歴史研究中心のSociety of Dance History Scholars (SDHS, 1978設立)を統合したものです。現在は学会長を、ロンドン大学ロイヤル・ハラウェイ校のMelissa Blanco Borelli教授が務めています。
ジャーナル	ダンスを扱う研究書籍Studies in Dance Historyシリーズ、学会紀要であるDance Research Journal、そして年刊の学会オンラインニュースレターConversationsを発行しています。
入会方法	HPトップの左にあるJOIN USにアクセスし、会員の種類（個人会員、学生会員、機関会員）と学会誌の購読を紙版か電子版にするかを選択します。個人会員でも、非常勤・インディペンデントスカラー・退職者割引があり、学生会員は学会参加への旅費補助やセルマ・コーヘン賞への応募もできます。個人の年会費は50ドルから195ドルで、クレジットカード、小切手、為替などで支払い可能です。 https://dancestudiesassociation.org/join-us-1

２．当該国際学会に参加して

ダンス研究者、教育者、アーティストが参加する大規模な舞踊学会で、毎年8月に大会が行われます。学会誌であるDance Research Journalは、舞踊研究において、世界的な影響力を持っています。2019年のノースウェスタン大学での大会は、舞踊史研究のスーザン・マニング教授が素晴らしい内容の会議に仕立てたことを聞きました。ボードメンバーには、米国、英国、ドイツ、フランスの舞踊研究者が名を連ねますが、2年に1回は大会を米国で開催するなど、運営内部では米国人研究者主導という点に批判もあるようです。私はSociety of Dance History Scholars時代の2011年に、大会テーマ「ダンスドラマトゥルギー」に合わせ、振付家・ダンサーのクシルジャさんと共に、レクチャー・デモンストレーション形式の学会発表を、カナダ・トロント大学で行いました。これが、のちに学会から刊行された書籍*Dance Dramaturgy : Modes of Agency, Awareness and Engagement*（Palgrave, 2015）に、この論文が収録されることに繋がりました。

3．海外の舞踊学関連学会の紹介

3-2. 英語圏の学会（舞踊学・音楽学）

International Association of Physical Education and Sport for Girls and Women（IAPESGW）

八木ありさ（日本女子体育大学）

1．基本情報

学会名（原語）	International Association of Physical Education and Sport for Girls and Women 【略名】IAPESGW(イアペスガヴェと読みます)
日本語訳名	国際女子体育連盟
学会設立年	1949年
事務局（場所）	Kathy Ludwig (Barry University, USA) – Email: kludwig@barry.edu
HP	http://www.iapesgw.org
趣旨・大会情報等	IAPESGWは、体育、スポーツ、ダンスを通して、またこれらの分野での女子、女性の活動を促進することを主な目的とした、多様な専門家で組織されている団体です。4年に一度、世界大会を開催し、実践者、指導者の情報交換、研究交流を推進して来ました。2019年で設立70年となり、世界40か国以上の会員がいます。2013年にはキューバ、2017年にはマイアミ、そして来る2021年には東京(2度目)での開催となります。また、世界大会とは別に2013年より地域大会（不定期）が開催されることとなり、2018年はテヘラン、2019年7月はマドリードで開催されました。
入会方法	HPトップ右から2番目にある「Joining IAPESGW」から入会できます。大会では、非会員の参加も可能です。 http://www.iapesgw.org/joining-iapesgw

2．当該国際学会に参加して

会の趣旨がエンパワメントであることとも関わって、参加者間のリベラルな関わりが印象的です。一応の公式語である英語ではない発表も、個別の交渉を通じて他の演題の発表者が通訳をするなど、協力して課題解決する姿勢と、自国の活動を積極的に報告する雰囲気があります。また、こうした連携の心が、同様のテーマを扱う者同士の国際共同研究に発展している例もよく見受けます。先般のマドリード地域大会では、口頭発表分科会のテーマが”Employment, occupations and the labor market of women in sports”, ”Participation of women in high performance sports”, “Women in recreational sports”, “Physical education and school sports: equity issues”など多岐に渡りました。

口頭発表、ポスター発表、ワークショップなどの発表形式が選択でき、発展途中の実験的な研究や、ダンス・スポーツに関わる先進的あるいは歴史的な取り組み、その哲学の報告なども歓迎されています。日本からの参加者も多く、スポーツとジェンダー、日本の学校ダンスの取り組み、生涯スポーツなどの領域で積極的に報告がされています。（公社）日本女子体育連盟が発足するきっかけとなった組織でもあり、若手育成などのいくつかの顕彰事業の中に、舞踊教育者を顕彰する「松本千代栄賞」が設置されています。

3．海外の舞踊学関連学会の紹介

3-2. 英語圏の学会（舞踊学・音楽学）

The International Council for Traditional Music (ICTM)

小林敦子（明治大学）

1．基本情報

学会名（原語）	The International Conference for Traditional Music 【略名】ICTM
日本語訳名	国際伝統音楽評議会
学会設立年	1947年（イギリス） 設立時の名称はThe International Folk Music Council, 1981年より現在の名称に改称
事務局（場所）	The University of Music and Performing Arts Vienna, Austria
HP	https://www.ictmusic.org/
趣旨・大会情報等	ICTMはすべての国や地域の伝統的音楽とダンスの研究、実践、記録、保存を目的とした学術的NPO組織であり、ユネスコの諮問機関にもなっています。研究発表を中心とする世界会議（隔年）の他、24の研究グループによるシンポジウム、特定のテーマに特化した会議、外部組織との共同会議が随時開催されています。 2019年7月にタイのチュラロンコン大学で行われた第45回世界大会の様子は、“The 45th International Council for Traditional Music World Conference”というタイトルでYoutubeで見ることができます（https://www.youtube.com/watch?v=CZ1yshrldmw）。次回の世界会議は2021年7月にポルトガルのリスボンで開催されます。またラテンアメリカ、東南アジア、オセアニアの音楽とダンスに関する各研究グループのシンポジウムが各々2020年に開催されます。ICTMで最古最大の研究グループ「民族舞踊学・舞踊人類学（Ethnochoreology）」のシンポジウムも2020年7月にリトアニアで開催されます。
ジャーナル	研究論文集The Yearbook for Traditional Musicは毎年発行され、会員はインターネット上で既刊誌も含めて閲覧することができます。
入会方法	HPトップの左にあるリストの「Join ICTM」にアクセスし、会員の種類（一般あるいは学生, 期間）とプロフィールを記入して送信します。会費は一般・1年で60ユーロ、学生・1年で40ユーロで、Paypalあるいは銀行送金によります。https://www.ictmusic.org/

2．当該国際学会に参加して

ICTMは組織名称にダンス（舞踊）は入っていませんが、趣旨にもあるように伝統音楽とダンスを並列させて研究対象としており、ダンス研究の発表も盛んにおこなわれています。私は2016年12月に国立台湾大学（台湾，台北）で行われた「東アジアの音楽の研究グループ（The Musics of East Asia ICTM Study Group）」の第5回シンポジウムと、2017年7月にリメリック大学（アイルランド，リメリック）で行われた第44回世界会議で、「阿波おどり」の音楽について発表しました。国際会議での発表は外国語による発表と質疑応答に挑戦することになりますが、自分の研究を文化的背景の異なる研究者に伝えるには、何をどう示すことが必要なのかも考えるようになりました。また自分と同じような問題意識の研究発表もあり、自分の研究をグローバルな視野で捉えるようになりました。

4．私にとっての在外研究

4-1. ドイツ・アフリカ

研究の基盤形成と人的ネットワーク構築

遠藤保子（立命館大学産業社会学部・特任教授）

1．基本情報

渡航先(都市・国名)	1、キール・（当時は西）ドイツ 2、イフェ＆オヤン・ナイジェリア 3、ナイロビ・ケニア
研究機関	1、キール大学 2、イフェ大学＆オヤン村にてフィールドワーク 3、ナイロビ大学＆日本学術振興会ナイロビ研究連絡センター・長期駐在員（センター長）
在外期間	1、1977年7月～1978年6月 2、1980年9月～1982年8月 3、2001年4月～2002年3月
目的	1＆2、アフリカの舞踊に関する文化人類学（民族学）的研究 3、上記研究目的＆上記センターの仕事
研究プログラム	1、国際ロータリークラブ奨学生 2、講談社野間アジア・アフリカ奨学生（現在：廃止） 3、日本学術振興会
グラント申請方法	1、本籍地のある福島県のロータリークラブ（クラブ区分：福島・山形地区第2530地区）に応募書類申請、書類審査＆試験 2＆3、応募書類申請、書類審査

2．在外研究を終えて

1、私は、キール大学のカテーザ・シュロッサー教授のもとで、アフリカの舞踊映像（ドイツのフィルム百科）を研究対象にして修士論文を執筆するための基礎的研究を行った。この留学によって、研究の重要な礎（一部）が築かれたと思っている。選考は、書類審査と試験：Ⅰドイツ語の①筆記試験と②口述試験、Ⅱ日本語の面接試験であった。ドイツ語は大学から始めたので語学力の程度は知れている。そこで、①の試験は、文法とNHKドイツ語講座内容を中心に勉強し、②の試験では、能力以上にドイツ語が話せるな、という印象を与えるために、そうだ、自己紹介を長くしよう、と思い、例えば東京教育大学を卒業しているが大学名を外国語でいう場合、大学はもともと教育をする機関なので教育を固有名詞と考え、Tokyo Kyoiku Univ.と記載したほうがいいのではないか等を話したのである。これを聞いた審査員は、「ドイツに行っていたの」と問うではないか。即「いいえ」と私。その後の口述試験で答えに窮した時には「緊張しているだけですね」と審査員。うまくいったかも、と思った。Ⅱの試験は、留学の目的とロータリークラブの目的を問うものだった。事前に過去問を聞き、対策を立てていたのでスムーズに答えられた。

さて、ロータリークラブでは、必要経費（往復渡航費、保険、滞在費）の支給はもちろんのこと、留学先のロータリークラブでカウンセラー役を選出し（私の場合：同大学・ダイン教授）、奨学生をサポートする制度がある。そこでダイン教授に学生寮を探してもらい、

4．私にとっての在外研究

ホームパーティに何度も招待されドイツ語習得の機会を作ってもらい、一晩中踊る舞踏会に連れて行ってもらい、楽しく踊り（振袖だったので大変ではあったが）、真夜中に行われるくじ引きで幸運の女神として壇上でくじを引く（写真1）等、とても充実した学生生活を送ることができた。

さらに、他の奨学生との人脈ができ今でも研究に必要な情報をもらったり、第2530地区のロータリークラブとも連絡を取り合い、時には協力してもらっている。例えば、福島の震災後、大学の震災プロジェクト（修学旅行ができなかった福島の高校生を公募し、京都へ呼び修学旅行の雰囲気を味わう）を実施した。その際、ロータリークラブから資金援助をしてもっらたことがあるほどだ。

また、責務としては、ロータリークラブの会合に出席すること、留学先では日本のロータリークラブの関係者に手紙を投函すること等であった。

この奨学金制度は、申請者の居住か本籍がある所、または大学か勤務地の所在地がある所のロータリークラブの推薦を得て応募するのだが、応募概要や試験内容がいろいろと変化しているし、地域によっても異なっている。詳細は、ロータリークラブのHP（様々な地区のHP有）を参照していただきたい。この制度は、とても有意義でサポート体制も充実しているため、特に院生にはおすすめしたい。

2、講談社には、アフリカとアラブを研究している大学院生を対象に1年にアフリカとアラブに1名づつ選出する奨学金制度があった。選考は書類審査のみ。私は、博士課程に入学した年、2回目の奨学生としてナイジェリアで2年間研究をすることができた。この留学によって、ドイツで学んだ理論と映像の知見をもとに、実際にフィールドワークをすることにより研究をさらに実証的かつ多面的に考察できたと思う。

この奨学金では、必要経費（往復渡航費、保険、滞在費）が支給され、責務としては、アフリカから月１回手紙を投函することだった。留学当初は、研究のことを中心に手紙を書いていたが、だんだんと研究の話だけではネタぎれになり、生活のよしなしごとを面白おかしく書くようにした。すると、毎月手紙を書くことがとても楽しくなっていった。

そして、この手紙を読んでくれた講談社の関係者が、帰国後の私に「手紙をもとに本を執筆してみたら」と勧めてくれ、処女作（1984年）『タムタム・イン・ヨルバ～ブラックアフリカの村に住んで～』として講談社から出版してもらうことになったのである。

現在、この奨学金制度は廃止されてしまった。まことに残念である。

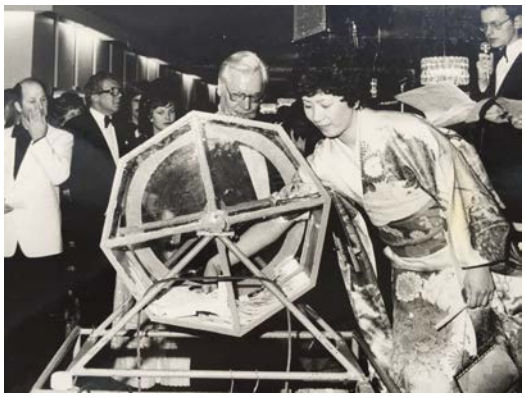

写真1：幸運の女神としてくじを引く筆者、
1977年12月、於：キール、撮影者：キールの新聞記者

4．私にとっての在外研究

3、日本学術振興会の海外研究連絡センターは、ストックホルム、バンコク、ナイロビ等世界各地（東京本部の他に現在11か所）にある。私は、1994年立命館大学に赴任した後、2001年度にサバティカルの機会を得て、ナイロビ研究連絡センターに長期駐在員（センター長、https://www.jspsnairobi.org/access）として1年間赴任した。選考は書類審査のみ。経費（往復渡航費、保険、滞在費、調査研究費）が支給され、住居も確保されていた。

センターの主な仕事は、協力協定等を締結している海外の学術振興機関等との連携、日本の大学の海外活動展開への協力・支援、フェローシップ等の日本学術振興会事業経験者のネットワーク構築・支援等である。私は、これらの仕事を行いつつ、センターのニュースレターを発行し、セミナーを開催し（写真2）、併せて自分の研究を行っていた。実はこの時期に博士論文を執筆し、翌年博士号（社会学）を取得することができたのである。

赴任した時のセンターは、庭付き一軒家で、秘書、メイド、庭師、門番、運転手、センター車2台、犬5頭がいた。秘書は、様々な雑事を行い、メイドが食事を作り、外出時には運転手がその場所へ案内してくれた。また、仕事の合間にサファリにいったり、モンバサの海で泳いだり、と私にとってはまるでお姫様になったような日々だった。

現在、このセンターの駐在員の公募は不定期に行われている。また、ナイロビ以外の海外研究連絡センター周辺地域に関する研究を行っている学会員で、駐在員に興味があり、しかも公募の機会があれば、応募することを検討してみてはいかがだろうか。

補足：短期の在外研究としては、1999年8月の1か月、国際交流基金の日本文化を紹介するプログラムに申請し採択された。選考は、書類審査のみ。経費（往復渡航費、滞在費）が支給され、エチオピアの大学や劇場で日本文化を紹介しながら、エチオピアの舞踊を研究したことがある。責務は、活動内容を報告書にまとめることだった。現在、国際交流基金のこのプログラムは廃止されている。これもまことに残念である。

写真2：セミナーで講師を務める筆者、2002年3月、
於：ナイロビ研究連絡センター、撮影者：センター秘書

4．私にとっての在外研究

4-2. アメリカ合衆国

異種の学問＆自分との出会い

外山　紀久子（埼玉大学大学院人文社会科学研究科）

１．基本情報

渡航先(都市・国名)	ニューヨーク・アメリカ合衆国
研究機関	ニューヨーク大学大学院パフォーマンス研究科 同大学院美術研究所
在外期間	①　1986年9月～1989年3月　②　1989年9月～1992年9月
目的	①　舞踊研究　②　現代美術研究
研究プログラム	フルブライト奨学金：大学院留学プログラム
グラント申請方法	日米教育委員会内にあるフルブライト奨学金プログラムに応募 （TOEFLないしIELTSの基準スコアを満たすとともに書類審査及び英語での面接） https://www.fulbright.jp https://www.fulbright.jp/scholarship/programs/index.html

２．在外研究を終えて

ニューヨーク留学の前半（1986年秋～88年秋）はフルブライトの大学院留学プログラムによってニューヨーク大学（NYU）大学院のパフォーマンス研究専攻MAプログラム(https://tisch.nyu.edu/performance-studies)で学びました。同じNYUでも実技を中心とするダンス専攻（https://tisch.nyu.edu/dance/courses/mfa-in-dance-and-ma-in-teaching-dance）と異なり、パフォーマンス・スタディーズ（Performance Studies :PS）は70年代以降の人文系諸学の地殻変動を反映して、演劇・舞踊・文化人類学・社会学・フォークロアその他の多様な研究に開かれた多分に実験的な研究機関です（詳しくは『舞踊學』第17号1995年掲載のシンポジウム報告「舞踊学の新しい方法を探る」https://www.jstage.jst.go.jp/article/buyougaku1978/1995/17/1995_17_54/_article/-char/jaをご参照ください）。当時活況を呈していたダンス・ワールドの拠点の街で「本場」のダンスを沢山見ながら「舞踊の美学」を研究するぞ、と考えていた素朴な視点は即座に崩れ去りました。毎週膨大な量のテキストを読み、リーディング・ノートを提出し、公演を観てレヴューを書いたり、ストリートの人々を観察して運動分析のレポートを出したりと、宿題の山に追われる日々、気がつくと「舞踊」も「美学」も日本にいたときには自明視していたその明確な外延や定義、自律的なあり方について根底から疑いを抱くようになっていました（当初は混乱しましたが、後になってみればよいことだったと思います）。マーシャ・シーゲルの元で修論（「Dance as Deconstruction脱構築としての舞踊」）を書いたあとは、半年ほどアーティスト・ブックのアーカイヴやオルタナティヴなパフォーマンス空間で知られるフランクリン・ファーニス（Franklin Furnace: http://www.franklinfurnace.org）でのプラクティカル・トレーニングに従事しました。

その後同じNYの美術研究所（The Institute of Fine Arts: IFA）（https://www.nyu.edu/gsas/dept/fineart/）での美術史、特に現代アートの勉強に転じたとき、同じ大学院のプログラムでも正反対の文化風土に驚きました。PSはワシントン・スクエア・パークに程近い

4．私にとっての在外研究

モダンなビルの一角、IFAはセントラル・パーク東側の元富豪の邸宅にあり、教授陣と学生の関係や雰囲気も全く異なっていました。どちらかと言えばPSは太平洋側（アジア）に、IFAは大西洋側（ヨーロッパ）に顔を向けている機関で、舞台芸術のミリューと美術のそれとの違いを肌で感じる経験でした。

留学前には思いも寄らなかった、いわゆる「蒙を開かれた」経験に恵まれた一方で、思い出すだに禿げそうな失敗もたくさんしました。英語は日本にいるときに真剣に取り組んでいなかったため（専門用語の知識はあっても日常会話ができない典型的な日本人学生）、呪いがかかったように話すことができず先生にも呆れられていました。人格チェンジしないと（そのためには体が変わらないと）ダメだということがわかったころには、日本に帰りたくない――日本語環境のなかでのかつての自分に戻りたくない――とさえ思って、ポトラッチ人生に拍車がかかってしまったのでしたが。

インターネットのない時代、赤坂見附の日米教育委員会に通ってアメリカの大学や奨学金の情報を調べました。故市川雅先生や石井達郎先生にもご助言いただきました。フルブライト・プログラムの中でも大学院生対象の奨学金（しかも全額支給）がなぜいただけたのか謎ですが、たぶん比較的稀少な研究フィールドとテーマだったこと、書類審査に提出した英文のエッセイが型破りで目を引いたかもしれないことあたりが決め手だったのではないかと思います。通常の審査用エッセイを読み飽きている審査者にとってはプラトンのマニア論を引用した書き出しは「ぎょ？」とするものであったのではないかと。面接はボロボロでしたが、質問に質問で答える、という窮余の策が以外によかったのか？

若い頃の海外生活は必ずその後の研究者としての人生の貴重なリソースになります。「ハドソン川に浮かぶことなく帰ってきさえすればいい」と友人たちに言われて送り出された私でも生き延びたので、どうぞ臆せずチャレンジしてください。

5．国際学会・シンポジウム発表報告

Asia Pacific Dance Festival 2019

高橋　京子（フェリス女学院大学）

１．基本情報

学会名（原語）	Asia Pacific Dance Festival 【略名】APDF
日本語訳名	アジアパシフィックダンスフェスティバル
学会設立年	2011年
事務局（場所）	A co-production of the East-West Center Arts Program and the University of Hawai'i at Mānoa Outreach College
HP	http://manoa.hawaii.edu/outreach/asiapacificdance/
趣旨・大会情報等	APDFは隔年（奇数年）で夏に開かれており、ハワイ、オアフ島の東西センターアーツプログラムとハワイ大学マノア校アウトリーチカレッジとが共同で企画しています。加えてハワイ大学マノア校のシアター・ダンス学部からのサポートもあります。次回は2021年とのことですが、詳細は未定です。APDFは、アジアおよび太平洋地域のダンス、ダンサー、コレオグラファーを紹介することを使命としています。そのためパフォーマンスを中心に、ワークショップ、一般公開講座、フォーラム、デモンストレーションなどを含んでおり、これらの活動は、異文化間理解を促し、多様でダイナミックな交流を育成することになります。
ジャーナル	発行されていません。
入会方法	大会ごとに、参加費を支払うことで参加可能です。

２．フィスティバルに参加して

2019年のAPDFは、ハワイ、オアフ島の東西センターやハワイ大学マノア校を会場に、7月22日から8月4日まで2週間の日程で開催されました。私はすべてのプログラムに参加しましたが、前半5日間は、フラの実技、マレーシアのダンスカンパニーASK Dance Companyによる実技と講義があり、後半5日間は、フラの実技、カナダの先住民族のダンスカンパニーDancers of Damelahamidによる実技と講義がありました。その間、屋外でのオープニングセレモニーや、日本舞踊、フラ、マレーシア、カナダのカンパニーによる舞台公演も行われ、2度にわたる小旅行もありました。計10日間の集中講座の後、8月2日から4日までの最終3日間には国際会議として研究発表の機会が設けられ、さらにフラ、ASK Dance Company 、Dancers of Damelahamid の各ディレクターが登壇する一般公開フォーラムなども行われ、充実した2週間でした。

研究発表では、世界中からアジア、太平洋地域をフィールドとする研究者らが集い、７つのセッションに分かれ、基調講演や口頭発表からワークショップやパフォーマンス、10日間

5．国際学会・シンポジウム発表報告

の集中講座参加者によるラウンドテーブル討論会など多様な形態による発表がなされました。私は「日本とインドにおけるパフォーミングアーツと癒し」という演題で発表を行いました。一人20分間の発表と10分間の質疑応答が持ち時間で、言語は英語になります。英語での発表にはかなりの準備を要しましたが、座長ならびにフロアの温かい雰囲気の中発表することができ、30分間はあっという間に感じられました。会場を離れた後も「先ほどの発表は面白かった」などと声をかけて頂き、今後の研究へのモチベーションにもつながりました。また自分の研究が他国の研究者にはどのように理解されるかという点にまで意識を向けられるようになりました。

今回初めて参加したAPDFですが、ハワイに居ながらにして、フラはもちろんのこと、マレーシアとカナダの先住民族の舞踊を学ぶ機会を持てたことも魅力の一つです。マレーシアという国の舞踊が中華系、インド系、マレー系という多様性に富んだ表現形態を有しており、ダンサー自身が、自らのアイデンティティと演じる舞踊の間に生じる葛藤を乗り越えて踊っていることを初めて知りました。また日本で義務教育を受けた私は、カナダの先住民族の歴史に全く触れてきませんでした。カンパニーを率いる先住民族のディレクターの舞踊を伝承する苦労や困難を知ると同時に、身体を通して彼らの歴史を学ぶことができ、魂を揺さぶられ、気づけば目から涙があふれていました。

©Asia Pacific Dance Festival and Maseeh Ganjali

6．委員会より

6-1. 学会誌編集委員会：森立子
『舞踊學』には、会員の皆様の著作情報が掲載されます（単著、共著、翻訳。ただし舞踊関連書で、本人から報告のあったもの5点以内に限る）。
ご著書を出版されました際には、随時、学会誌編集委員会宛てにメールにてお知らせください。なお、学会誌編集委員会のメールアドレスは下記のとおりです。
学会誌編集委員会メールアドレス buyogaku.editorial@gmail.com

6-2. 2020年度学会大会：塚本順子
2020（令和2年）年度　第72回舞踊学会大会
日時：2020年12月5日（土），6日（日）
場所：同志社大学　今出川校地（烏丸キャンパス）
　　〒602-8580　京都市上京区今出川通烏丸東入

6-3. 例会企画運営委員会：八木ありさ
　第24回定例研究会が、2019年 6月15日（土）に緑豊かな立川の地で、東京女子体育大学を会場校として開催されました（参加者58人）。
　「一般研究発表」には例年になく演題が多く集まり、多岐にわたる領域の8演題について、希望に応じて発表20～30分と質疑が10～15分の比較的ゆとりある時間を使った勉強会となりました。「例会企画」では「大学における舞踊カリキュラムの現状とその可能性」と題して、舞踊系専攻を率いる研究者がパネリストとなって話題提供と活発な議論が行われました。
　参加者、発表者、座長の皆様、また登壇者の皆様、誠に有難うございました。会場校としてご協力くださいました東京女子体育大学の先生方、学生さんたちに感謝申し上げます。
　なお、研究交流のさらなる活性化を目指して、第25回以降の定例研究会の開催方法について協議中です。新しい形にご期待を！

6-4. 研究奨励賞選考委員会：柴真理子
研究奨励賞の推薦のお願いとして近日中にHPに掲載致します。また、HP掲載に併せて、会員MLでも配信致しますので、どうぞよろしくお願い致します。

6-5. HP管理委員会：杉山千鶴
HP管理委員会より、以下の2点についてお願い致します。
（1）シンポジウムやワークショップ、研究会、展示の開催や、研究助成金の募集などの学術的な情報を、以下のアドレスまでお寄せください。会員の皆さまと共有致します。
　　※　会員個人の主催によるものや、舞踊公演は対象外とします。
　　情報は以下のアドレスまでお送りください。
　　jouhou-dance-hp@kir.jp　（舞踊学会HP管理委員会）
　　皆さまからの情報をお待ちしております。

（2）日本学術会議のニュース･メールを随時MLで配信致します。
ぜひ、お目通し下さい。

6-6. 学術会議関連：杉山千鶴・貫成人
・日本スポーツ体育健康科学学術連合・・・杉山千鶴（早稲田大学）
日本スポーツ体育健康科学学術連合第3回大会は、2019年9月9日（月）に慶應義塾大学日吉キャンパス内で開催されました。当日は阿江通良代表による基調講演の後、加盟団体の共同企画によるシンポジウム2演題が行われました。
　詳細につきましては、日本スポーツ体育健康科学学術連合のHPにてご覧下さい。

・2019（平成31、令和元）年度芸術学関連学会連合報告・・・貫　成人（専修大学）
1、2019年6月8日（土）、大阪市の国立国際美術館において、2019度第一回委員会をおこなった。また、同日、第14回公開シンポジウム「アマチュアの領分―過去・現在・未来」を開催し、百名弱の参加者があった。
2、2020年度第15回公開シンポジウムのテーマを参加各学会に公募した。
3、11月9日（土）、専修大学神田校舎において第二回委員会をおこない、令和二年度のシンポジウムテーマ、会場について検討し、舞踊学会の提案が採択された。副担当学会は演劇学会。2020年6月13日（土）に開催される予定。シンポジウム趣意書は2月に各学会に周知され、同時に、パネリストの募集がおこなわれる（応募締切2月末日）。

6-7. NL編集委員会：波照間永子
猪崎会長の巻頭言にもございますように、本ニューズレターは、情報発信を主眼として編集しております。
当面は、国内外の舞踊学関連学会の紹介や、在外研究報告、国際会議参加報告の記事を中心に展開していく予定です。
また、学術シンポジウムや研究会等の情報コーナーも次号以降もうけますので、有用な情報を、**情報受付窓口のアドレスまで（HP管理委員会をご参照下さい）**お寄せいただければ幸いです。

7．事務局より

その1．年会費納入のお願い
振込だけでなく、現金の納入も受け付けております。例会や学会会場でも受け付けております。お気軽に事務局までお声掛けください。

払込取扱票
口座記号番号：00960-5-154553
加入者名：舞踊学会
年会費：7000円

その2．登録情報変更申請のお願い
住所、勤務先等に変更のある方は、学会HPの「各種事務手続き」から「会員情報の変更申請（会員限定）」のページにて変更後の情報をお寄せ下さい。
もしくは、事務局までメールでご連絡下さい。
HP：http://www.danceresearch.ac/jimu.htm
事務局メール：danceresearch.info@kagoya.net

その3．メーリングリスト登録のお誘い
本学会では、様々なご案内・ご連絡等を、メーリングリストにて配信しております。登録をご希望される方は、事務局までメールでご連絡下さい。
事務局メール：danceresearch.info@kagoya.net

舞踊学会事務局
〒305-8574
茨城県 つくば市天王台1-1-1
筑波大学体育系　寺山由美研究室
danceresearch.info@kagoya.net

編集後記・奥付

・はじめて舞踊学会の委員の仕事をさせていただくことになりました。舞踊学会のNLは私にとって、お話を伺う機会のあまりない先生方の研究内容や経験、研究者としての思いを知ることのできるものでした。今後はより実利的な情報を提供していくとのこと。私にとってはまだ一つ一つが勉強ですが、少しでもお手伝いできればと思います（小林）。

・今号から新しい編集方針のもと、情報発信に特化したニューズレターになります。海外の様々な研究事情やフェスティバルの様子など、私自身も新しいお話を伺うのを楽しみにしております。会員の皆さまにとってより有益な情報を共有できる場になるよう、微力ながらお手伝いさせていただきます。引き続きよろしくお願いいたします（宮川）。

・舞踊学会ニューズレターの方向性の転換という、特別なタイミングで編集の仕事に参加できたことをとても光栄に思います。学会員の先生方の海外でのご活躍について拝読し、自分ももっと挑戦しなければと、良い意味でプレッシャーを感じることができました。より多くの皆様の学術シンポジウムや研究会等の情報を今後とも掲載できればと願っております（安達）。

本号より、小林・宮川・安達の新規委員による強力なサポートのもと、新たな方針でニューズレターを編集することになりました。皆様にとって有用な情報を提供するよう努力いたします（外山・波照間）。

ニューズレター第17号
発行日：2019年11月27日
編集（姓の五十音順）：
安達詩穂　小林敦子　外山紀久子
波照間永子　宮川麻理子

発行者：舞踊学会（会長：猪崎弥生）

ご意見、ご感想、掲示板への投稿希望は以下のアドレスまでお願いいたします。

ニューズレター編集委員会
danceresearch.newsletter@kagoya.net